

「大宮公園にあった温泉に浸かってみる」解説

1 資料の文書群について

古沢花三郎と古沢家文書について

古沢家：

- ・忍城主成田長泰の家臣で、大里郡大麻生村に土着。
- ・近世期においては名主、明治期には戸長を務める。

古沢花三郎：

- ・安政2年(1855)～大正13年(1924)。古沢家12代当主。
- ・母よしは文人、教育者として知られ、号は文亀。村塾を開き、漢学や書を教えたとされる。
- ・明治2年(1869)に名主、同12年(1879)に戸長。
- ・学校や男衾郡役所、県の事務、蚕糸、土木職等に関わる。とりわけ土木職では田村組の事務職員を勤めたこともあり、八重垣の田村重兵衛とはこのかかわりか。
- ・明治11年(1878)からは自由民権結社の七名社の第二期社員として加わり、のちの人脈形成につながったとされる。

古沢家文書：

- ・古沢家に伝来した文書群は、現在当館と国文学研究資料館に収蔵。
- ・古沢家は文政元年(1818)の火災で、それ以前に伝来した文書は焼失している。
- ・村政関係や治安・訴訟関係、兵事関係のほか花三郎以下の時代の書状関係等から形成される。

2 大宮氷川公園と温泉

大宮氷川公園(現埼玉県大宮公園)：

- ・明治18年(1885)開園。敷地は元氷川神社の境内地。氷川公園、大宮氷川公園とも呼ばれた。
- ・明治16年(1883)に日本鉄道第一区線(現高崎線)が開通した時に、大宮に駅ができなかったことで、町の衰退を危惧した地元住民による駅の誘致と公園設置の請願運動の結果、実現に至る。
- ・明治末期から昭和初期には、東京近郊の行楽地として多くの観光客が訪れるようになる。
- ・本多清六博士の構想により、大正から昭和にかけて公園整備が進められ、スポーツの殿堂、赤松と桜の公園として現在でも人々に親しまれる公園に。

大宮公園と温泉旅館：

- ・大宮公園内には料亭、温泉旅館が昭和初期頃まで存在。「万松楼」、「石洲楼(藤

の戸)」、「八重垣（松友館）」の3館が有名。

- ・万松楼については正岡子規が訪れ、気に入り、夏目漱石を呼び寄せたエピソードがある。

- ・八重垣は大宮公園内から昭和5年(1930)には既に見沼川畔に移転か。経営者は下村房吉。室料は2円。見沼川は蛍の名所として有名。

- ・移転背景には大宮公園の拡張、整備が背景か。

3 用語解説

- ・深謝（しんしゃ）：深く感謝すること。
- ・倍旧（ばいきゅう）：以前よりも程度が増すこと。
- ・粗酒（そしゅ）：客に勧める酒をへりくだっていう語。
- ・差繰（さしくり）：都合をつけること。やりくり。

4 史料の要約

温泉旅館八重垣の店主、田村重兵衛が古沢花三郎に宛てた書簡。大宮氷川公園内に料亭と温泉がある旅館、八重垣を3月20日に開業した。ついては同月21日午後1時から披露のための宴会を行うので、ご臨席いただきたい。

参考文献

- ・さいたま市立博物館編集・発行『第27回企画展 桜～さいたまの桜の景観～』、2016年
- ・埼玉県立文書館編集・発行『埼玉県立文書館収蔵文書目録第59集 古沢家文書目録(1)』、2021年
- ・埼玉県立歴史と民俗の博物館編集・発行『博物館ブックレット第九集 名所大宮－鉄道のまち・公園のまち』、2025年
- ・日本遊覧旅行社編集・発行『全国都市名勝温泉旅館名鑑 昭和5年度版』、1930年